



開國起原

9 5  
2110  
56



U5  
2110  
51

開國起原卷五十一

開國起原卷五十一



慶應年間邦内之形勢四

慶應二寅年八月八日同防守相渡

公方採此程中より水不例ニ水為其ニ交追、水疲勞ニ為妨  
此自北上萬一水危萬事ニ為玉川、序相續ニ候一  
指中納言殿ニ仰出、且長防ニ候玉急ニ付  
市名代より出陣ニ成、格是又ニ仰出

八月

一橋中納言信吉

此程中より不例の如く追々疲勞の増ゆるに付此上は危  
 萬に事あり玉に 申相續し候に仰出且防長し候玉急に  
 為申名代出陣可仕古所沙汰し趣き畏れ不肖し私に存  
 事古様し蒙 台命に候偏に恐悚し玉何ぞ申清可上振  
 急に申長防し候に即今に急務國家申事危し堪に付乍  
 不及粉骨碎身微力も申届かぬ勉勵仕一死報恩の覚  
 悟に申候に付 大統中相續し候に玉に付私事も負荷  
 堪に申候に付 公武に對し憂に恐懼に己に付申清し候

海舟書屋

新に申事申上り昔再三丹四陣清仕に交申許容し玉に内外  
 危島し以時長彼は辭退仕に申日申送し内にて人心に向  
 否に拘り如く私事申可未生も難中何分國家し以大事に  
 難習に早し申清申上り振可仕古所申事強に申中事も  
 方一人身に進退此期に古事務り申事急に限徒に回辭仕りも  
 却に 台意に申旨具し國家し以事危信實仕只爰了身  
 之に申候に申事近に深恐入に付自身に肩力も忘れ  
 申相續し儀申清仕 申名代に付速に出陣可仕存存  
 尤重きし申職仕し候薄力申事才而詮り届に付覆録し  
 恐更に今日美迫戰慄甚堪に付此後最重き事申事上り

急言中許容、水沙汰成下、依仕度、幸存、右中侍、幸  
中上、誠恐誠惶頓首謹言

臣慶喜

同月廿三日

公方極中不創、遊、此、堂、外、水、養生、不、為、可、去、日、即、上、刻  
於大坂表、費、去、遊、幸、綾、言、語、蓋、言、仰、出、通、一、橋、中、納  
言、殿、而、相、續、遊、去、日、上、極、可、幸、稱、吉、於、大、坂、表  
仰、出、孫、以、精、勤、可、未、勵、吉、仰、出、殿、出、仕、面、於  
席、老、才、縫、殿、頭、列、座、河、內、中、演、達、

海舟書屋

九月二日 勅諭

大樹、費、去、上、下、哀、情、得、御、察、遊、自、暫、時、兵、事、為  
見、合、樣、可、收、旨、水、沙、汰、自、是、防、長、於、日、侵、掠、地  
早、引、拂、鎮、定、樣、可、取、計、事、  
別、紙、通、從、所、所、仰、出、間、取、計、方、後、於、藤、抄、表  
松、平、亦、養、守、相、達、可、此、段、為、心、得、古、供、面、并、在、坂  
軍、目、付、可、達、

紀、伊、中、納、言、殿、為、前、軍、惣、督、出、張、之、處、度、奮、戰、及、決  
萬、指、揮、之、行、在、由、之、守、食、

御満是し事ニハ永ニ滞陣し候太儀 思召上様厚可  
有奉力也告 所沙汰し事

俱出陣し候度ハも同様可也達し事

別紙ニ通紙伊殿ニ從 所所ニ 仰出間為心得供  
し仰し并立坂軍目付ニ可也達し事

同月廿八日板倉伊賀守ニ差出候封事

勝安房守

一 所総督ヨリ藝州藩士ハ附し長物表ニ仰達也

海舟書屋

所所ヨリ 仰出候書付之候

大樹公薨御し間暫時休兵し事一并侵掠之地引  
拂可申云々し事一ヨ以テ彼國民共中ニ之候情  
實貫徹不仕多故是迄ニ通之旨書趣ト存込  
右書達共藝州表ニ預置吳ニ振中聞且同家  
ニ差出候書付ヲ熟考仕多ニ一應尤ト右候旨  
ハ其是其跡ヲ見テ未タ其情實ヲ深ク不察  
或ハ道路ノ浮説ヲ以テ一向ニ事ニ實ト心得不達  
ハ如路者疑念中上ニ事ト存込  
近年以來征長之役事ト當今海外之中上ニ

之、内地之形勢ヲ深ク考究不仕從來之  
 行政蹟ヲ固守仕處ヨリ生之分毫之違終ニ千  
 里ヲ誤ル也今ク内閣内平徳ナルヲ過激生漫ニ邦家ヲ誤可キ存詰  
 此処分此の場合之立到義ヲ敢テ私怨ヲ以テ名ヲ公義ニ假リ漫ニ戰争ヲ  
 相好ニ華計リトモ不存内閣新来ニ固執家ナドナル者恐ニ堂上  
 諸家威権有之者ニ遊説イタレ小名節ヲ押立々日ニ及有差不少大凡善  
 惡共上者ニ所好ニ在リ一身ニ榮貴ヲ求ル者ハ通常小吏ニ心腹ニシテ  
 等ト志ト同業ニテ遊説スル者真ノ識者ニ違々ヲ深クは亦不存遊雷同  
 説ヲ以テ天下ニ至論トシ思召事今ヨリ別置ハ尤正誤トハ存ル也此是モ亦其  
 情實ヲ以テ考ルルモ内尤ニ象トモ存存其故モ上者モ下者モ皆然ト不存

海舟書屋

察何事モ 朝命政令ナルハモ存別可キ存詰是ニ及ルモ是非

天下響之庶可致ト計存存此ハ寧今ヨリ國情如何ヲ不知ニ寡聞ニ  
 出義ト存ル凡上者モ交通寡少ニテ其臣子ハ口ヲ閉ル事ハ不能知ク何方  
 毛卓絶之臣子少ク唯々君臣ニ相接ルモ皆々温良ニ質有之ル者而已ト  
 庶幾ルヨリ久矣シテ餘人孰人モ皆如斯トモ思偶過激烈トモ凡ク亦真似レ  
 者モ亦一附ハ奇トセラルモ終ニモ存存厭或ハ召捕押込トモ存存中存存  
 幸アル時ハ又寛容ヲ以テ是等ヲ使役セラレ故下者モ益々上者モ意  
 正ニ熟察シ其機ニ應シ浮説紛々終ニ上者ヲ疑惑セシムルニ到リ中存存  
 賢明ニ是是等々小節紛々以テ是モ大英断ヲ暗スニ到リ百中其嗣後々  
 朝命政令ハ公平ニ至當ト其文字ヲ異ニシモ實ヲ同敷仕ルハ孰人カ反

命可待哉此大政之関り官達慎而考究可仕ハ判然タル常道  
 義誤而唯其名分ヲ以テ号令致シテ必ラス  
 朝令共ニ落地ニ到ラシメ忠存者却テ不忠ト成行内地紛擾之基  
 ヲ固メ可ヤ事ト痛憤ニ堪不ヤ義ニ在ル臣オモフ爾等解兵ニ事  
 實ニ反掌之間ニ決定ト成テ後ハ大ニ手改メ之也 仰出ニ不及諸侯  
 今議ヲ以テ決定トスルニ事存ルニ事京攝ニ旨問ニ兼シ浮説  
 或ハ其私ヲ掩ハントシ或ハ其前説ヲ伸ベテ其私心ヲ達セシムトシ又其  
 中間ヲ折衷シテ一説ヲ立ル等風ニキニ波濤ヲ生シ黑白異同ノ説數  
 百里ヲ隔テ、是等ヲ吟味スルニ大體念生シ難クトモ難ク然レトモ  
 反復シテ懸念セハ其意深意ノ注ク所難窺トモ難ク然レトモ然レトモ  
 然レトモ

海舟書屋

兵ニ事ハ對陣シテ不戦而已然レニ官民ノ力役愁苦ヲ高察  
 解兵ニ及シ者ハ陽ニ不顯ト陰ニ彼カ情實ヲ以テ深ク情察有  
 之事ハ軟侵掠云々モ亦推テ可キ事者有リ殊ニ改機ハ一動ニ際彼  
 我言ハスレテ黙察ト令セシテ變者ニ在ルナクハ有ルヘカラス若夫人々為  
 邦家謀ニ其志厚カラハ尤以テ深ク思フベキノ時ナル状況ヤ其誤ヲ誤ト  
 シテ陋ヲ陋トシテ大政ニ新ナル時  
 輩下ニ紛々下士ニ雜説ヲ以テ一時叢生トシテ其難ク事場合  
 モ有リ是等ノ情實ヲ唯表面ヨリ推察シテ改機ヲ規フ者ハ明  
 察トイフベカラス  
 此處ニ云彼モ亦遠索不以テ誤解アリ彼我悉ク誤解無シトイハ

シヤ況ヤ又從前ノ私ヲ掩ラテ一時覆轍ヲ再臨セシムトスル者ハ尤以  
 テ不明ト云フヘキナリ畢竟其極ハ國民鎖國ノ陋習ヲ脱出ス者寡  
 シテ官人其政機ニ汲クタル者殊ニ一新クテ所ニ不厚ク致スル如ク  
 流ク恐ルハ尙茲迄言ノ日久矣シテ終ニ衆口鑠金  
 英皇ノ翻路ヲ生セシムルニ隔可申事ニ由テ今漫ニ心緒ヲ書テ冒  
 高聽ヒテ恐入ヲ得世内ノ事ハ其勢莫以上

寅九月廿八日

養地過將曹より來翰云

鴻便一簡持呈佳冷氣日増ハ先以昔臺谷ハ静謐ハ震良可ニ為事  
 恭賀ニ至事存先頃西下之故ト過分ニ蒙寵過重ニ知方佳事存ハ屏後上國  
ハハ様

海舟書屋

様々如何ハ未ハ取留ハ後モ其内中ハ何モ種々ノ世評不絶傳  
 少仕何事ト許多ノ内配意ナク在ハハ其外ハ幸恐察ハ西多ノ事  
 己來モ養物ハト過日ニ是ノハ其モ其内中ハ小倉道モ其今取合  
 事内中ハ類々分恐入ハ事ニ内中ハ德先以内達ニ未成ハ暫時  
 兵事ノ入合ハ類々分恐入ハ事ニ内中ハ德先以内達ニ未成ハ暫時  
 帰若別紙字ノ通中出候ハ先方ニ印合モ仕ル処今ノ書面ノ  
 印中ニ如何分テ預ク至其ハ私只内管中ノ事ヲ得止事ヲ取歸ニ  
 候妻細ニ承升主水正様ハ内達仕ル尚先方ノ事情使ハ若  
 兼ルル処此内書付ノ後未ナリ疾ニ兼知仕居共ニ此内書  
 内内添書ハ有命仕ルハ直ニ討入ハ類々分恐入ハ事ニ内中ハ



於て使し者に右尋由素より左様し水添書ハ出りし様也  
 いかゞ又上國迄し風説を左様し第も右尋の付使者出立  
 前々此度沼津閣老と右伺の事も又左様し第も決り  
 無し越に付し者右尋の処左様し右尋の邊りて消し  
 可有の事の中由此度水書付面にも先方書面にも水書通  
 暫時兵事見合ふも仰出りて真し一時に第も可有の事  
 他邦に踏出居るも決り採地杯し即ち其の中已て是討  
 忽ち右成進退仕居る第も付又其程の討入に右成の第も  
 要所より踏為防備し外に其の中付引取の第もいりし  
 仕意且も出立し者其の中書付を以中守の共是に度しに相し

海舟書屋

水事七距離仕第も付才、速し納得引揚も仕る交侵採地杯  
 中振成の様子と云ふ水氷解安事通徹仕るも右尋の交採  
 と大概の紙し吉越に高直討才し後詰り仕るも右尋の使者  
 引文返答も毛利龍前より前後の討才し相京高直度兵  
 助等の中右小倉路戦事の中倉方餘程も強右成の中詰り  
 仕るも越に其の中右尋の委悉の義書に可有の事第も先方  
 二、係振の帰坂し上何しと水抄振可有の事此水書付し水  
 連りて水連に右成の第も可有の事何分の帰坂し上し第も  
 只管右待居る様子に右尋の中右使者の中右詰り越に水書  
 比校仕るも右尋の中詰り右立渠も右尋の情実中右尋と信後

任心振之存表向以達昔之未成之勢之免角終意解之之於  
幸存之事件之盡く使表之何と之く奉詔任心之付中上之  
不及之也其考合之方成之勢可有之望外之書加中上之未達之  
模樣中上之勢も可有之望外之書加中上之未達之  
中上之誠恐再拜

九月七日

將 曹花押

傳 安房吉楳

別紙

弊國多年之微志一朝湮滅任心之之く種之實任未達之今日之  
形勢之未成國固不堪悲歎任心之之く最前奉 勅始末一冊之

海舟書屋

美由哀訴任心之共下情通達之不意中達之

閣下輕辱之罪之重之極之極立之立之後尾州督府國情之熟  
知以陣排方之之文再ハ

將軍家之進北之未成成績之三監察弊國事情之一之為意

美由哀訴任心之共下情通達之不意中達之  
美由哀訴任心之共下情通達之不意中達之

美由哀訴任心之共下情通達之不意中達之

美由哀訴任心之共下情通達之不意中達之

美由哀訴任心之共下情通達之不意中達之

美由哀訴任心之共下情通達之不意中達之

天地覆載之仁國より様々其事より之勿論之付強以從來  
之事謀謀誣罔し之出之地形勢之五の義之兼知仕之  
臣子之分を尽す 閣下は在出主人寔罪哀訴付度也決  
朝廷に副情上表仕且道を都藩に假し殊に之を表す出  
先根拠之事は自ら出役より言面差出之也一切の酌取も  
之に却台軍勢は向既に防務小瀬川口は内侵來者中如  
是接及迎戦執中小倉藩に於て從來誣謀に次才も方し  
於小倉原臺岐古及九州指揮として古澤立頻に諸軍古  
督促に政侵入の期限未更に付是亦進入處度交戦に  
及は處不因も自ら居城より焚引揚に古成の付隣傍諸如

海舟書屋

中津古藩に副志漢述波の漢田藩より第一止戦應接も也  
及は如素より一懸宿怨無しに付連に之を任せる交何如  
一旦の城郭より火定以警愕し玉に付漢田度若因備に  
之次守中述の事より加る争戦の勢に古成の古地し利子  
戦の時も是に従ひ進退攻守の用兵も常道中も疎に  
有し假令進守の決も決白人の土地を侵畧政も心底  
折るも之の交此度侵掠地引拂に振出達方し之に  
退は熟考仕の交作恐真に  
朝廷に為 知名は古守中の中守に好も定に正邪判悉公平  
玉當し交を以沙汰可也仰出共上して八侵掠仕に否

とハ弊國ノ不意ニ以中洞人々可ク仰付ハ事ナク上暫村兵  
事ハ見合ハ中洞人々唯

將軍家ハ表ナク以暫村ハ見合數日ノ後再ハ討入ト事

ナク然モ久モ今ノ終捕証固ニ餘ニ出ハ事終ニ中洞人々是モ

士民骸骨草野ニ暴レト終モ公道ノ芽塞キモ未聞キ也

ナ此餘 閣下ハ亦出宛罪哀訴仕ハ期可方クト希見仕

臣子ノ玉情ニ方ク一且寸歩を退キ再ハ終捕証固ニ事

隔リトテ逆ニ主宛を雪ハ村々ノ臣恐

天日光明雲霧去テ一ノ村々ノ事ナク有ハ生ハ交ハ成ハ邪

曲直判然而照臨ニ事ナク隨ニ公平ニ事ナク中政典亦奉行

海舟書屋

ナ為立リテ必志ニ事ニ付弊國ニ於テハ数年を經ハテも時を

事待ハ心得ニ事ナク間何事亦後部表通暢仕ハ振ハ成下度

不堪至頼依ニ事ナク後ニ事ナク預至下ニ事ナク取計

奉頼ハ以上

九月

毛利大膳  
家 老 中

此頃ナク助メ羨ムセト云英國公使アルコックノ意見書

遠隔未交ノ人種驟ニ集合セルハ其習性ノ大ニ異なる

して必利害損益ノ説隨テ起ル然レテ利害ノ振替トモ

部分ニ其善部ノ多キトモ惡部ノ多キトモ專政事

公儀も人の不為に因り唯を誠を信の心を以て初約を確守  
し力えて信義を失われ極めて利害多しと投棄す  
しと小損害ありも又從て消釋す

日本古より外交せし今日より俄に其禁を弛められはて投棄  
極つて多し心も潜つて其故を視て彼の安情を徹知せ  
ざる事亦損害ありと孤疑愈々する心も因て自然  
に政事も害ありと因て遂に大に初約を觸違はるる事  
あり初約は何れも大君と各國と結ぶる交はり此不恰  
測の事あり及ふ亦遂に害心ある侯伯及浪匪等更に其  
別の事を為さしむれば此等の者を損害の源として遂に

海舟書屋

目今の大事内乱外患を併合する事を願はしむ然れども今日不  
の得失より或は其故を彈定するの好機會ありと抑最初結  
約の日唯彼是の開港を許して志し公儀祖宗鎖閉の禁を改め  
されハ藩臣浪匪の外人を殺害し居館を焚燒する者皆祖法  
を據として口を藉く事を得る外國人を孤疑するも國の今  
大君祖法と條約しる合一する事を務まして唯兵庫大坂赤  
つらさるの港を認め銀も心を勞して又外國高官を拒絶  
屏去するも専力を用心又未開の港をつらされハ既に開く  
ハ唯條約の通りと約し

我儘に其命を益損せしハ振事容易ありと思ふ更にも又

帝より撥夫の令を播告せり今大君を妨碍を文容せしめて  
 開港の正に於て縦に彼我の貿易を許しと雖も其安んずる貿易の法  
 正しくお返しり子細く外高し内高し交易せしむと雖も官の久許せざる  
 高し縦に交易せしむ事をも許さしあり故に日本の貨物日本の港  
 に入らば必政府の運送料せしむるは三港皆大君の地也故に其税  
 利皆大君の一手に歸し是れ大君一己の私販りして天下公共し貿易  
 易に非し去れハ諸國自國村内は産出せし貨物といへば幾多の  
 手数を經りて自ら外國に販賣せしむ能はざるは故に不平  
 を生じ非し愈多し其法度唯大君の少富國の美術を專し  
 私事として得て已れ能はざる思へり又欲美し堪へざるの心あるも事  
 不

海舟書屋

支へられず勝ひ施す事を得ん

又日本人外國人と惡情締交せしむる得せし其皆官府にて  
 支へ妨げあり去れハ其友の公使といへば使伯と周旋詰議する  
 中事を得せし其は是事も付ても執務の心消する期ありて倍  
 許し難視の中事も愈増せり執政の而も其下りたり候伯外  
 交より事能はざる後其聰明を敵に研明せしことあるは今  
 日より交通遂に衰へしに歸し下の関路絶へ横濱將に毀んと  
 せし時よれり嗚呼内訌外証併せ臻り並に舉人とも定し危  
 急存亡の秋あり大君是をわづせんとせしむるは再此上より交易を  
 稀しむるは一港に鎖をや外人を域外に屏去せしむるや知れ大君

政府の人右等の不意として外國の官を罷免し罷免後其の  
 子や外人を採擷せしむる邊境へ屏去せしむるハ皆断して成らざる  
 の事あり我々も、云はざるを得ざるあり此事今も及て早く  
 日中人民に布告明知ありハ則日本政府の大福にして亦我々の  
 大福あり現今文際物及皇帝の命令と侯伯の議論と決して  
 皆極大不可の事也故に強て此三件を遂げ行かんことを欲せられハ  
 必大害あり此事の果して行われざるを望み日本を為すは自然  
 道徳の善心あり速に成らざる事あり然れどもして廢止し更  
 別の高きを以て可なり我々の強て其非を遂んとせし  
 必報而も歐米二洲の糾紛を、一、同盟各國採擷屏去

海舟書屋

の談を文に於て賀文の利を望むるハ非の専ら國令を履め  
 國威を損もす因り今英國日中と賀販の利を國算す  
 十純て僅に百中の二分五厘に過ぎぬは是を止すも更だ妨げ  
 あり然れ共其令を強められハ又隨て非理の令を來さん事  
 あり是れり故に力めて拒ざるを得ざるあり日本の為ニ熟計  
 するは是と大に違へり今世界既に全く開け何れの國何れ  
 の人も皆外交せざる事を得ぬ又既に文を以て拒く一政府は  
 限る事能はぬ故に人情善文せざる可くは物貨善賀せざるハ  
 自ら支善文善賀の道小技害なき能はぬといふも亦小技  
 害を恐りて是を妨げハ必却て至大の危險を引出す一唯

我西洋人古より能く通弊を研知せり獨り日本のこ非に  
 在東の諸國多く皆を酒を固守せり故に貿易を減制する  
 あり居各地に盡限をあり文際を編還するあり我ハ之を開く  
 を欲し彼ハ之を開を欲し各々欲する所を競ひ迫り至れば必真知  
 るに彼我共の斟酌する事ならず一に此の意を謀るに至り子細を  
 彼も迫り我も迫り互に一步を弛まざるに道に止む能はざるの道なり  
 干戈銃砲を假らざるを得る也今日中と外國と既に各欲する  
 事を競ふの場と至り互に於て互に一步を弛むるの中道不  
 りる事や此開を致しては得る研精し却考し妙答あるを極て  
 可くても致さるに殆ど大事と至るに抑外人何の為よ日本よ

海舟書屋

来りしや他より支政府の和親と支國人の和交とを謀る為あり  
 交易と至てハ支國各適宜の量を斟酌するを佳とす交易國  
 より強て為る可くは又政府強て禁限する事能はば外人の這  
 入るも若し監納條中と致し日本太平の為とありさる事あり也  
 日本治國の神裁と長とる事ありや政府能く研究し果して  
 其妨害なきを明知せハ惡を為る候伯と比同して是を屏去  
 せしむ欲するハ亦極めて暗愚の不為とせし帝の勅令も亦限制あら  
 ん事を要す大君と迫り能はざる事を命する事時勢決しては  
 り可くあり又大君も如何に帝の命ふれはしては國の為と成  
 らざる事幸せざる事なりとす一勢を極め理を屈すも帝命を



奉行せんと欲すハ必外兵を以て京師を犯侵せしむるに  
見ゆれば十年前英國軍を率けて支那を破る支那を國の大  
巨細豆の半ならず其兵の多き四百十萬ありき又四十年前英佛  
同く支那を討て二月して海岸より北京城を攻入經る所の  
城堡を平夷し軍卒を殺傷し遂に盟を為して歸り  
今帝を難購する惡法度の中事能く西洋の堅艦利砲を  
輕視し只實情恐るるに足らずや決て此理ふらひ左  
あらんか方今の事交易の道一方損あれば必廢も双方利あ  
らば必行これ必當む交易すれば物價必騰る既騰れば必輸出  
せんと輸入品多ければ價必低る低らば必買入商人利あれば

海舟書屋

販賣の利をけりハ販止む故に市制せざるの中より自ら市制ありや  
して交易の道市況濶し玉れば故に邦内人民困窮物を欠く玉  
らば是自恣交易道に拘束ありて自恣に困らばして政府只官に  
拘止せられ遂に流れの一滴に歸する如く他日早抗の歎を招く  
交易の上にて政府甚禁限を加れば其関預せざる人民之利  
子沾被せざるを得ん極て困窮の人民多くして獨りこれ富利を  
專らするハ甚正理に違へり五ヶ年以來唯大君の港を以て一人の  
利を以て餘所の民人を甘滋を與り膏を以て漫る法度各封所  
産綿蠶茶油の類自ら官港を來り官の手を獲りて交易  
其利を得る事ありハ決て今の如く人心劫掠恣其言を以て

さし一條約中既各法度の交易をも許せし果して之言の  
 如くふら今日よ玉て既十國中交易の利普く各を便利を授ふ  
 へ一決して米穀を貯蓄し下民の怨苦を招き事ふるへく又  
 無用の破産者有るの敷も廢棄する事ふくも費用を報して文  
 易の有月十施さ八國人皆欣く然も長をあらへきふり甚度伯  
 達識し外人を疾視するも交易を妨礙するも八人全く如く  
 幕府政治の悪きと外交以來法度の費用夥多し因て起れ  
 り各國太平の時とんせ必軍備をふさぐ能はぬ然も日本  
 あり八更に軍備を為すの資ふらん其故何ぞ在東の國  
 支那朝鮮の如き更に恐るべきを足らふ方今四外國盟約条

海舟書屋

書も新し別な結んで必日本の寸地も掠奪するを堅く拒  
 して北は東西の國も亦更に可虞を足らぬ此道も及して戦争を  
 改まら合邦の産物も挙げざる外國破産し事ふるも是れ  
 明白歎息あり我思ふも日本國今日よ事ふる大に應ず物産を  
 一示す才識を弘め便利を起し貨幣を集む國內を豊饒に  
 實を一一無用の破産を築く勿れ必太平無事を保す  
 已れり兵を起し自ら敗る招く勿れ抑何の事も因て外患を  
 りと思へや今外國戦を好むも非も土地を食ふも非も唯苟も  
 神約を破ると外人を殺傷するも外人を執終するも此三件ハ  
 或ハ將に弊端を正しへ一今伴茶茶同合して一と成り改

府今日の所為ハ實ニ中心甚好き處あり唯、彼約を確守せ  
 らん事を望むのみ今四大外國合同して日本に對し不平等の道  
 路を好て非難せざる好共目三ツあり其一は必交易を妨礙せら  
 其二者必是を殺傷せん其三者必既に開きある港を、支へ妨け  
 ざる事を四ヶ國公使皆政府に對して作る處にして在堅守確定  
 の監あり譬へ日本の土地尺寸も是を我に与ふといへとも  
 支へ法ハ又四大國決して一己の私情を管む事能はざるあり  
 四國後々此の道程を陳述し大君子強諍せり彼より日本  
 侯伯の中、未必同ん敵の人ありし、趣希老彦是之を遠漢の  
 書史に因り憂ふに至言と云へし外國公使強諍の言詞のミ

海舟書屋

邦も内侯伯も同振卓執の見あり夫開國論ハ明白直達し  
 して瑣語餘曲折も、其ふれハ速に答け行ふし、漢則を空々  
 狭し交易を苛制し、這南を妨礙せざるを轉して治國の善い末を  
 謀ま、一諸侯の故法を去る政府と外國と真の朋友善交を不  
 さハ我、身更に他ふし唯双方に益あるをん、わろふハ必や今の危  
 急を觀して善好の時、其ふれ、一、此らハ六國中の道路を便  
 にして交易を盛舉して人心の折合も必も善の場あり、其意款  
 の情深らん、其ふれ、一、其外の答、其ふれ、一、病者の答、其ふれ、  
 を加、如く前件内、其外、其治の劇症あり、其ふれ、一、其末必  
 開國より、其ふれ、一、其必、其の強あり、又別、一、其の云へきあり、政府

の力を出しては能く外國人を掃蕩せしむるに成功の後必又別々  
 一大害を生せん一大異國ありて日本の弊を去りて攻取らん又  
 海寇浪匪の徒を掃蕩せしむるに他あり和親盟約  
 吉山お救ふの道ありあり然して邦内必ず時を待たして敵を  
 起すの徒ありん我思ふに敵國外患は非ざるに必内憂を起  
 さん今我々の述べの諸害は皆鎖港掃蕩の敵あり故に今の  
 國を治むに任ずる者支國の爲に務めて心志を同ふし帝  
 も大君も侯伯も皆終て可ふるとするの全策を講究せしむ  
 可ふに大君今日にありて未だ可ふとす港を閉ざし大小侯伯の  
 交易を欲する者も自國の元港を許さしむる諸侯も各條

海舟書屋

約を結ぶ共此の事は其の事候に害あるに條を刑去し大君  
 一己の交易と一己の税利を私せらる國內普く利を得し止む  
 港の税利を集合し其分を帝に納むし祖宗の鎖法を公然  
 と廢止せし政府あり能く此事を果し行はんは四大國同  
 情に歎息し又報するに他の件を以てせん日本の土地永く  
 保護し決して掠奪可く諸侯を連衡して外人を讎視  
 し交易を妨碍する長物の爲のむきを必討平し砲臺を撃砕  
 し大君の命令に従はしむし大君あり兵不足は撥軍を出さん  
 又江戸海濱し交易の一區とすし便ふるに唯公使の居館を  
 掃蕩せしむるに

慶應二年寅十月

山階

常陸 宣

此度園事掛依而勞理乍中上他出剝止宿且從來不行跡旁以整居被 仰出小事

正親町三條前大納言

勤役中急之左大弁宰相以下結黨建言之次才乍令兼知不加制止却同意不心得之至云 仰出小事

中御門左大弁宰相

海舟書屋

大原左衛門 督

兼之門流より相連の勢も有り之文去八月晦日其身為官柄且老年若事誘引結黨建言之段不憚 朝憲不敬之至依之閉門云 仰出小事

北小路左京權大夫

高野 三位

穂波 三位

高倉 三位

榊 中将

愛宕 中将

植松 少将

高野 少将

園池 少将

高野 少納言

千種 侍從

岩倉 侍從

四條 大夫

西洞院 大夫

西四辻 大夫

愛宕 大夫

海舟書屋

澤 主水正  
大原 左馬頭  
岩原 大夫

兼右門流より右連の勢も有るに交去八月晦日結黨及  
建言少使不憚

朝憲不敬之至依之羞扣之 仰出小事

寅十月

同月廿四日周防守右連

松平民部大輔佛蘭西國に為ら使に美意に言ひ 仰出間  
為心得向く可右連小事

慶應三年丁卯正月周防守相渡

主上御不豫之憂 市養生不之為叶 舊律廿九日

崩御之遊之旨 出機 僅伺 唯五日 惣出仕 今日より 鳴物停止

松飾取拂殿中平服之事

正月四日

同月廿三日壹岐守相渡

從 市所之 仰出 趣 有之 旨 長防討之 暫時兵事

見合相成之 交此度 市國喪之旨 一同解兵可 故廿日

仰出

海舟書屋

右へ通向之可也 達也

是月徳川民部大輔も 佛菜西國へ 差され 萬國博覧會の 形況を 閱せしめ 是れ我邦外國博覧會に 加盟せしむの 嚆矢なり

正月十日 横濱より 出帆 美添 同外 白山 真人 正山 高石 見

守田 邊太 一日 比野 清作 杉浦 愛蔵 池澤 篤太 丈高 松

凌雲 木村 宗三 眞作 貞一郎 山内 六三 郎 保科 俊太郎

山内 文次郎 水戸 殿家 兼氣 池平 八郎 井坂 泉太郎 外

五人 松平 健後 中 兼家 横山 主税 海老 名 郡 次 小 立 原

壹岐守 兼家 尾崎 俊経 等 あり

卯二月長防士民之義言

長防士民一統泣血言狀願抑主人父子獲幸本寺對

天朝幕府忠敬之道在令度身家之困苦艱難之不忍

中吉志の如く幸に粉骨奉じて遂に海内一統を成すは

操仕度より其代に心事に違ふ

郭談 台論より古より其巨細を知る食分は其國に忠奮

之餘正忠之後し中沙法に精意を生じしは子に秋少壯し

若主人父子に主君の如く連宵に於京師幸恐入の始末に

族より拒むる主人父子一國兼知仕代に其忠の如く何れ

海舟書屋

恐入の如く自早速支に其志に自其位に即其立の要忠督府

度張前大納言授巨細の如く其令良極速に其解兵の仰出も

是右京師に一条飛跡の如く其端の如く其志に其入の如く

情其の如く其成下りの如く其海陽邊の僻に其固頑固愚直に

性實

郭談 台論より古より其忠に忠奮に餘確守の如く其忠に

其忠に其忠に其忠に其忠に其忠に其忠に其忠に其忠に

其忠に其忠に其忠に其忠に其忠に其忠に其忠に其忠に

其忠に其忠に其忠に其忠に其忠に其忠に其忠に其忠に

其忠に其忠に其忠に其忠に其忠に其忠に其忠に其忠に



乃少名届巨細の事也其事二付其上と云ふ事平昔の定典し  
此處より仰出<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>一統<sup>レ</sup>平湯屋<sup>レ</sup>居<sup>レ</sup>外<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>也此處  
夏<sup>レ</sup>玉圍<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>意<sup>レ</sup>外<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>連<sup>レ</sup>面<sup>レ</sup>仰出<sup>レ</sup>主人<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>右<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>連<sup>レ</sup>として出<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
名<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>老<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>連<sup>レ</sup>却<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>拘<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>圍<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>將<sup>レ</sup>惑  
不<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>連<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>情<sup>レ</sup>實<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>奉<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>願<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
名<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>做<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>勢<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>向<sup>レ</sup>領<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>侵<sup>レ</sup>掠<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>民<sup>レ</sup>塗<sup>レ</sup>炭<sup>レ</sup>也  
若<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>恐<sup>レ</sup>

聖天子平昔聖明仁慈し 仰思<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>考<sup>レ</sup>執<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>  
不<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>好<sup>レ</sup>美<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>望<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>情<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>止<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>防<sup>レ</sup>扞<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>便<sup>レ</sup>若<sup>レ</sup>仕<sup>レ</sup>止<sup>レ</sup>役<sup>レ</sup>  
候<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>張<sup>レ</sup>門<sup>レ</sup>長<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>拘<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>至<sup>レ</sup>振<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>伺<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>存<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>處

海舟書屋

此處中松平伯耆子候<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>拘<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>老<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>巨細<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>情<sup>レ</sup>實<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>届<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
不<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>後 幕府<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>命<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>房<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>殿<sup>レ</sup>態<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>下  
鄭<sup>レ</sup>重<sup>レ</sup> 仰<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>程<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>全<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>望<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>情<sup>レ</sup>實<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
今<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>沙<sup>レ</sup>汰<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>拘<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>望<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>情<sup>レ</sup>實<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
合<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>也 仰<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>急<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>望<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>情<sup>レ</sup>實<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
圍<sup>レ</sup>圍<sup>レ</sup>平<sup>レ</sup>城<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>仕<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>止<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>場<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>  
事<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>沙<sup>レ</sup>汰<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>待<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>望<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>情<sup>レ</sup>實<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
將軍<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>去<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>由<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>勢<sup>レ</sup>歎<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>望<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>情<sup>レ</sup>實<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
主<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup> 仰<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>望<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>情<sup>レ</sup>實<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
愕<sup>レ</sup>悲<sup>レ</sup>歎<sup>レ</sup>恐<sup>レ</sup>懼<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>望<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>情<sup>レ</sup>實<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
事<sup>レ</sup>存<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>望<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>情<sup>レ</sup>實<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>

先帝聖明仁慈、所使、以寬仁大度、  
 處最前、其次、  
 則、  
 知、  
 幸、  
 此、  
 其、

新天子 所踐 祚加之 將軍 所宣下也

先帝所寬仁之 處之意也

所恩澤幸蒙之 振之也

海舟書屋

此、  
 意、  
 以、  
 此、

二月

長防士民中

演說手和

朝廷、  
 使、  
 言、  
 國、

其餘亦借地仕事亦有領内之勢收兵仕事也豈  
石友地之玉言及一戰幸公守崇之得仕合後果之也  
勢之取釀也若斗之只官掛念仕居之付友地之而辭不  
以事至平常也故之沙汰之仰出之也其形人若出張兵  
間此後亦合至天下之根仕度之事

豐

今般

朝廷序初改綱紀 而維新之時其成就之國內士民也  
別紙之道歉狀中出於私也同根日夜希中其居每之也

海舟書屋

若古惠懷謝之玉言也其臣子之得己之情實亦敵一取之下其交  
根而取斗之程一結之堪至願幸存此後  
安藝守授之仰上之根幸賴以上

二月

毛利大膳 家老中

同年三月癸上

一昨年十月中條約 勅許之兵兵庫之被止也  
趣早遠外國人可中渡之安左之忽尾解之及公折角  
平穩之趣意水泥之可未歸且一旦取結之條約未變也  
唯之信義之外國之取失而已之而詮可也行役之也





決て此中の上上元港昔輒く建言可仕ニ云々

皇國之此為利害得失却考其考一何れも何れも是日建

言仕ニ通し此等ニ各此中ノ言ニ永久 中國神務其立極重

大小再三斟酌仕中上ノ次才ニ此上外ニ却亦可仕極ニ

此中一旦取極ニ條約變更ノ勢ニ而詮難此時事信ニ

此中同各國ノ中立ノ勢方ニ最ニ過日建言ノ趣意を以て

連言事ニ此中ノ在方續キ國事多端ニ折々ト中ノ重大

ノ事件ニ付聊モ少歩捨何ト取取中ノ中ノ言ニ而此海勢ニ

此中ノ安是之遷延仕居今更彼是中上ノ反對

相定決テ恐縮ノ至事存ニ此中ノ前件ノ次才國家此安危

海舟書屋

ノ界ニ付幾重も一身ニ引文此中ノ中上事存ニ右ノ情安萬々

此兼知事為立高今一應ニ之々 朝議ニ招仕度此後少尋ニ

付言ニ 奏問仕ノ以上

三月廿二日

慶 喜

大阪城 英吉利ニニストル 臺城ノ長ニ續

二月廿五日

一 英吉利ニニストル九半時ニ後銀門若より騎兵所屬大士

此門外ニ白騎兵下馬一同附屬同而より外回方此月有方葉

極内ノ外ニニストル下馬 附屬ノ言のモ 是より此云同進相致此云

園上迄大月外園迄八月外如逆殿上間上通了替付侍長大月外  
外園迄八月外如逆殿上間上通了替付侍長大月外  
但椅子用之  
口茶如之

但給仕外國迄迄支配向節之

一 清白書院の奉命之由書院役之相法

一 三ニストル為葉口大月外外國迄迄八月外如逆殿上間上通了替付侍長大月外

候入口言同々奉命之由書院役之相法

換抄年

一 清白書院中々々清白書院

出清椅子之由用言 上意由曲縁之由為掛一急安慰之

上意有之

海州書屋

一 奉命之由奉命之由椅子用之及之由上候腰城之由度

一 内桐茅之由茶如之ニストル之由同形度如之

一 口茶子同形

但内給仕内小腰居候節之口茶子八奉命之由若奉命迄迄之由口茶子

一 内福合見付奉命之由迄及之代へて退席

一 通舟之由の始終

上候奉三ニストル之由同形迄及年之 之由 上意有之奉命之由

及換抄大月外外國迄迄八月外如逆殿上間上通了替付侍長大月外

一 清白書院の奉命之由書院役之相法

一 奥向之由口茶子同形迄及年之由若奉命迄迄之由口茶子

大慶間渡りて投保隊ニ出送存立

一 大目付外國奉行目付殿上向より三ニトル案内いふ一牡丹向の幕下大慶間渡りて投保隊より八年高き若年奉行等一同案内より登懸席に居り一同存立

一 小屏直殿より上り 出陣掎子より用名 上意より曲派より 掛奉行より

若年奉行大目付より人外國奉行より人目付より人掎子用より神理用より奉行等 諸之迄あり但し給仕より性善信外國奉行支死 神目見よりより之より文動より右屏より 立陣 上意より奉行等より及掎子牡丹向の幕下大慶間 渡りて投保隊近年奉行若年奉行見送る

一 大目付外國奉行目付殿上向より三ニトル案内いふ一牡丹向の幕下大慶間

海舟書屋

退去暫時休息

一 退散より後大目付外國奉行目付殿より目付殿より目付殿より目付殿より送る

一 小玄園より大玄園より近外國奉行目付殿より諸兵衛海軍奉行

一 警備向より多量より通文より一國公奉行

各國公使上坂持謁より仰付より付後來外國公使取

扱振より規則より取極より本城江戸より仰越より通

一 今扱格別より古禮典より各國公使坂地より台呼より付若

坂即日為尋問上使旅高に伊賀守兵越りる台に振

台に準て横濱帰意より上出府致しより為尋問上使旅



雖は越可成は在歸着し上出着て送連可越斗間  
横濱に歸着し美亦兼知可成は不取敢て滞歸着し  
水祝状可成也

一 各國公使以後出着波し水用談可成は亦此方も旅寓  
出さし事も有て互に往返波し可成也

一 公使歸着し上出着て英佛亞蘭等大禮海歸着て  
水祝し趣着て水役邸に相應し各食應可成也  
右は大禮首尾全くと成也

但此節は閑話雜語而已言水用談も無し其以後  
連も公使出着波し亦水用談も無し其節も

海舟書屋

水役邸へ水招一庵し水食應可成又彼し旅寓も水  
越各食應も水更可成也

一 水用談言公使水役邸に亦出さし亦以茶菓子而已言水用  
談海に後も酒有苦言出さし事

一 江戸若横濱に於て外國も神奈川等も水用言  
不拘折し私に為尋問公使旅欵も亦越談可成也

一 公使并附屬し士官應談して外不事も定も亦越も不苦  
也事

但外役言言引合の助方も亦同也事

一 公使水役邸に亦越も亦次し間も送迎し事

一 公使の意見を書籍文種に教へて振外國を以て市中に花  
押し小の方可用の事

但し用向し外惠款の上を書籍を以て而一修丁  
定事二可成事

一 都立の取扱向条件に振合に準じ聊も輕慢し仕向し改  
正可成し事

兵庫の石港に自高社取建方並に用達金

見込し後中上書籍

此度兵庫港の石可成に付立し長崎横濱支港に仕集

海舟書屋

三 石港の石成に度毎に石損失に成西洋各國おわし港を以て  
政府に利益を得る方法として石交し定以幸恐るる次第なり  
商人組合に仕法を以て石元を商人に一己に利益を而已耽  
る故に後々幸存の將又兵庫並大坂に外人店を以て取扱  
に成し付立し支不地平均の築立を以て凡石拾万支程に未撤し可中  
に修運上を波戸揚並に夜燈掃除方役の石役宅西國往還西  
宮の兵庫とて間道附留の外に石忠計に一八九拾万支に  
當年の石出方を石成可中尤地平均の築立を以て石必地石貨屋  
に成し付立し石入並に元高に石返し可中石必地石貨屋に  
石一、一時に練度し石に石運上可以下石用達金に

年々後浪言の仕埋し積りては其も一村は保慶氣可  
 中免の角も向うは去年火に八九十万支の出高にちか  
 其迄来り多端に柄柄の用途も出高に中八九拾万支  
 臨時の出高に容易に便令の程成りて出高に取替少  
 此貯蓄に成るに非常之急需に向ふ方可然らず右の  
 港に自高社取違方共の用途金出方に代勘亦仕存付  
 左に中上

一 大坂町人共の内身元異者共人程人撰仕兵庫  
 易商人頭取中渡右に者組合諸商買取引以ては餘  
 者右共人の組合に取引成り後一神文易の如し商人共一已

海舟書屋

利益のいも食う為元身し者共互に競ひ取引し  
 外人し為し利権を得らぬ當時携渡表商人し如く今日僅に千金  
 益ありて明日其壹万に損失出表り其共全に商人組合中一  
 己に取引成り右取引に次第に陥りて後右に商人一己に損失  
 し振に未だ一商人其利を得ざるを一失す所を得ざると同、即ち  
 即序国内の如き失失に損失に成り商人の損失も百商人の損失  
 も高く中国の損失に成り遂に全國に利権を失し外國商人  
 として蔑視され西洋商人の為に東洋わけて貨殖の地をよ  
 後定に歎息し次第に中下統て外國人と取引以ては其  
 何れも外小交易の商社西名コンパニーに法に基きて中上

盛大し貿易し 所國し利益ニて未成中も交と幸存ハ

一 此用途金出方し 俵凡百万兩と見込ハ 此文中上通商年中  
 臨時の爲高ニテ此の程も如く 可なり 裁差向ハ 六月下旬  
 よりして 月滿又仕シハ 半ラニ 間ニ 合中も交 即今莫大し 金  
 高の入用ニ 付 勘弁仕ハ 交右ニ 前言所人 其より 金子を 出右ニ  
 仕拂進ニ 仕埋し 方々 幸存ハ 去大坂商人 是上納金  
 も 渡し 且て 只この用し 中渡の こと 利益を 以生業ニ 渡ハ 商人  
 せし 如何 振し 引當 手形 未渡ハ 其の 債中 上ハ 俵ニ 方し 交 然  
 中 兵庫港 諸式 此入 用金ニ 座ニ 以 百万 交ハ 金札 右町人  
 廿人 程ハ 若せ より 是出ハ 俵 申免 辨ニ 未成ハ 町人 其の あり

海舟書屋

利考ナリハ 事此の 債中 上ハ 振未成 可中ハ 在 廿人 三百万 兩と 大數  
 し 如ハ 此の 廿人 商社 頭取ニ 未成ハ 事 此五 歳内ニ あり 及 近水  
 し 内ニ 加ハ 其の 方ハ 船中 東西 近江ニ 豪商 廿組 合ニ 屬ハ 可  
 中ハ 百万 交位ニ 出来 可中ハ 幸存ハ 其又 右ニ 是も 危ニ 振ハ 此  
 右ハ 内ニ 此用 達中 債 税金 取立 役ニ 出張 為仕 取立ハ 税金 立  
 合ハ 上ハ 復タニ 未成ハ 月 子元 金入ニ 未成ハ 是も 危ニ 中ハ 交ハ  
 横濱 表當時 税金 大凡 壹ヶ年 百万 交 餘ニ あり 可中 兵庫ニ  
 新港ニ 幸少ハ 三分 一と 見込ハ 三ヶ年 程ニ 皆 済未成 可中ハ  
 見込 中ハ

此一 元港 此用途 金百万 交ハ 見込ハ 大凡 子ハ 右程ニ 免り 中

多交之其用途狭く平帯以入用し急需に一時に繰合未  
成り可急存

一右町人共の美免に成る金札の仕様確るハ

壹両之札 拾万枚 拾万両

拾両之札 一万枚 拾万両

五拾両之札 二千枚 拾万両

百両之札 七千枚 七拾万両

合 百万両

右札を頭取町人等にて取調仕立上りし上元方大帳へ番替を以  
而勘定方以月台方にて立合し上判印を以て金銀同振通用致可

海舟書屋

中昔の船渡に成る公儀より出入り金方よりハ月港の番替并  
決式入用拂方より金札の正金之町人等より為に出る拂方に成る  
節より分合し利分以下に成る事

右札通用國に限り候共船渡以下に知し上取調可  
中上

一措幣通用に候に利税より一より安き公儀より出候に成る  
扱仕度より一神措幣より百万両あり千万両あり現在に安貨  
備へ玉措幣に候に事故引替は如何に成り候に支に候に間  
上下是より信用し通用に支に候に安に候に利権未立物便に  
在るに候に不中の候に支那往昔より候に措幣并帝國諸侯に

楮幣を現在に実貨ふくして、復國を起す。狼より楮幣を以て  
りる。利幣を節量、支は上下是を信用、波の中道、同行同便、  
物とて、楮幣と実貨との相場、格外急隔、玉より、是は中  
支邦并、市國內諸屋、楮幣を多量に起す。泰西各小、楮  
幣を富より起す。其安天、測し、速なり、同一楮幣、  
利権を失ふ、利権を得る、是は、其基、りて、其具、  
其成、富を、其富の確証、ある、次に、楮幣、公儀、  
の旅行、一方、實、可、其、自、今、其、實、貨、  
共、楮幣を、考、今、其、貯、蓄、  
建、即、今、行、公、  
海舟書屋

三都町人、其、寺、社、に、上納、金、  
存、  
公儀、楮幣、を、信用、  
此、度、  
之、  
一、

楮幣、  
右、  
二、  
楮幣、  
急、

支右仕法も左に上

但停止仕法も元港に上取に事柄隔りしに當時  
格幣の往々を拒むと後來格幣を止し格幣と可

中上

一町人々、金札停止仕法

三年より元稅銀百萬支に成可中は付右に町人々より  
美出の金高に皆法に成るるに成るるに前書町人々金札停止  
に仰出の町人々は是に成るるの利を有し市入用は是に出  
る元利を成下切に成るる事如聊も故障不致し是に成るる  
是に成るる町人々金札を成可中

一公儀にて金札

前書中上書より  
起る格幣

成る仕法

前書三年目より又は此の年にも成るるに進み稅銀も成り  
現立し元金變化貨百萬支に成るるに成可中は是に成  
公儀より金札の成り可成左に百萬支、現立變化貨  
に百萬兩に成通し成可中

一公儀并町人々と上下に金札施行仕法

前書三年目より町人々金札の停止に成るるに町人々  
おわて、公儀に對しは非分聊も成るる故障不致し  
是に成るる路、是に成るる高臺の助金、是に成るる事  
故必款預可中立其成るるに、公儀おわては現立し成

貨よりなる格敵中より旅行の成り下りて一時具加金を爲  
 ずし由り候に成り、又此の年にも成り、前書既述に定化は  
 此貯蓄に成り、節又、可人、格敵停止に成り、又  
 款、可中、立、る、る、承、く、具加金を爲す由り、此の成  
 公儀おわても格敵、写る、起る、此旅行に成り、上下共格  
 幣、利行、に、其、中、公儀、格敵位、及、可人、格敵位、及、  
 利権、今、公儀、格敵、可中、  
 但、此、三、條、三、年、十、一、百、万、又、此、三、年、中、十、百、万、又、交、易  
 此、如、盛、大、に、有、り、候、に、必、然、之、力、を、可、中、新、一、港、場、に、事、成  
 此、又、交、易、の、助、不、十、分、に、唯、一、此、年、若、未、定、に、大、に、仕、法、に

順序に取らるる連年の事と、候と、幸存

一、右、外、氣、燈、ガスラン、書、信、館、ポストナフ、寺、公、儀、お、わ、て、取  
 設、に、成、り、莫、大、に、利、益、に、成、可、り、候、に、右、に、取、建、可、  
 成、元、金、の、足、り、に、都、市、の、下、に、出、ま、る、可、中、に、向、商、社  
 の、取、建、に、存、心、に、右、に、開、港、自、然、に、未、定、に、折、柄、に、基、本  
 此、立、の、事、に、若、事、に、成、り、成、り、不、し、に、其、英、米、の、下、知、り、候、  
 幸、存、  
 一、前、書、中、上、に、件、に、外、國、に、事、件、に、關、係、情、候、に、三、三、に、由、り、  
 向、市、内、政、に、關、涉、仕、定、以、由、經、過、に、由、基、本、に、自、私、に、熟、考、仕  
 此、後、中、上、以上



卯四月

塚原但馬守

小栗上野介

服部筑前守

星野豊後守

四〇七〇三

同年五月河内守相渡

兵庫開港の儀に付別紙一通

序所より仰出趣京地より中越間此段万石以上は面々可達

海舟書屋

別紙

兵庫開港の事元来不容易珠

先帝の爲止置の儀也大樹之餘義時勢言上諸藩建白

趣も有し當節上京の四藩も同様中上間誠は不爲得止

御美許未成の趣も諸事急度取締未立可中事

一 兵庫の停の事

一 條約結改の事

右取消の事

五月廿四日

同月廿四日前同人相渡

長防六處主之役二付別紙一通後

仰所云 仰出「尤由交主」不之後政之可也 仰出「仍先此

候未達」

別紙 勅諭

長防之儀昨奉上京之諸藩當奉上京之四藩各寬大之

交主可有 市沙法言大樹之於也寬大之交置言上之

朝廷同様被 思食「間寬大之交主可被取計」

同日廿六日越前藩松平守和家之四藩建白

天下之大政公明正大之玉璽之矣一時代の事内外緩急之辨を

海舟書屋

明之執行事由望之守之務未叶勿端之由望之全神不可救今日

玉之根柢を推究仕之也作憚 幕府年來之由失神醸出之内

殊二防長再討之由一舉之由物議沸騰天下離叛之由也未及

次才之由望之依之明白玉璽之由物之由防長由交置一可為急務

終合之上屬建言仕之由三言萬之退考仕借交自兵度一港防

長事件之由二緩急先後之順序有之右三別之由曲直當否

之分之由立 幕府由及正之由實跡顯れ之由顯之由拘事之

付法虚心之由以交案之由立之由根柢存之由右二件

朝廷可之令 奏之由持業仕之由 皇國中安危之關係仕之

之由是非至公至大之道之由私權之由為救治之由大策之由立

北有以中慶重大之事務懸止再考之越言止仕

五月廿六日

越 品

荻 州

土 抄

宇 和 書

同四篇より 卷上

兵庫開港長防の要として二件の當時の容易の大事として存し今之辨  
幕府長防再討の事奉り名を師と稱し兵威を以て壓倒可成り得  
し其全く奏功の至天下に紛乱を引出し以て才知各藩人心離叛物  
議未起の時其の中を執りて即今中國基を如く其急務を公明

海舟書屋

曰大に以て置るに天下にふり如臨し一因治るに成る長防の役  
大抵父子官位流着の平常に少少治る成幕府又中一實謀者  
三代才一と存る判然明白實謀者疑わく天下人心搖る安堵  
可仕才二兵庫開港の時勢を考へ以て其要を以て得順序可中  
萬に却考仕先殺り幕府下向り其未一口

勅問討答の仕内前文二件順序區別を以て幕府存し中其  
也之文一四廿四の長防の事大に其要可一取討兵庫開港  
し其才知最上京に四篇も同様下者も誠しふり得止出る  
免其成去し師少治るに其言付持尺仕實以意外に才知  
警愕仕合ふ其從 朝廷中少治るに義容易に可守上

此即一事而實甚難也  
實未達之勢然止亦在場合  
以上

五月廿六日

此頃夫之通商也

中國內務務裁

稻葉美法也

會計裁

松平周防也

外國事務裁

小笠原克岐也

陸軍裁

松平縫殿頭

海舟書屋

海軍裁

稻葉兵部大輔

同年六月壹岐書在渡

某十二月七日  
兵庫開港江戸最大坂市中  
人居易於此  
右之趣市料私領寺社領  
兵庫以不港  
以美免之儀

兵庫以不港  
以美免之儀

松平大隅也

星野豊後守

竹内日向守

小笠原伊勢守

設樂右次郎

此度兵存出長港之旨より高社組合の取立自高社頭取等より  
 仰自同不居各地より外有、関係より入用助等少役は月並向  
 高社組合の者等、出金に候中論もも急速に申付申付  
 此の期限も多進り候事並に此勘定事同様に趣を以高  
 社に金札通用に候事新勘定美談申成候方、可申候事  
 就中右手續の取締助に候事評議仕候趣左に申上

海舟書屋

一 金札摺立紙に候事要領に候事自古より下へ渡り候事以當時

江戸表の勘定不取りて流立紙を厚紙流立紙に候事幸存

一 札仕立方に候事銅板に彫刻為政摺立に上高社生公に役而候事此

古摺役向言未改事辨書帳面に書為勘定方町方内月自方

立合役、押切改印書以方、未渡可申上幸存

但押切改印に候事平筆を果入候事下に候事押切改印は勘

定方町方内月自方定印を以封上、高社頭取に未渡可申上

役、立合書に候事一切押切無に候

一 右引替元金に高社生公より出右元金に仕理方に候事、税銀を以進

水渡り候事、自税銀取立に候事、高社生元金積り帳面に書

押切し上り落し右渡り連白元金三右傳ハ落し取手方可共何ハ

後)

一 金札正金三引替方ハ依テ高社会ハ共高社会取テ外以用達也  
方知カテ持手以テ引替可中後

一 金札正内ガ替交札為引替持手ハ其者品至札更取ハ先

一 應ホ乱帳交付ニ方ハ其者召連所幸何カ可辨出吉意

可中後至ニ幸存ハ

一 高社会取立ニ自ラト近郷直家高社会貿易取極方元ハ金一  
其出金一ノ度カハ持手以テ其差許ハ成路ト出金高ニ應

以下ノ金可成吉大坂兵庫取最市在ハ高船成ハ振付度也

海舟書屋

存ハ

右ニ可共ニ思ハクハ向ハハ高船取調十右振可任以度幸何以上

卯六月

一 高社会發行可成金札招立出末ハ自京師以勘定事ハ小栗  
下総書ハ尺中送回送見本ハ内書兩ハ分左ニ字出也

押切印文字書

出同本所出来

土壹兩



裏



押切の上り落し、右渡り連台元金二右傳ハ落し取手方可共個ハ

後)

一 金札正金二引替方ハ後ハ高社会ハ若ハ高社会取立外ハ用違也  
方切カテ持手以テ引替可中後

一 金札ハ内ガ替交札為引替持手ハ若ハ其者必至札更取ハ先ハ

一 應ホ亂帳交仰ニ有ルハ、其者召連所幸方ハ、可辨出書意ニ

可中後至ニ、幸存ハ

一 高社会取立ニ自ラ、近御意高社会貿易取極方元ハ金一ハ  
其出金ハ、一廢カ、一持手以テ其差許ハ成路ハ出金高ニ應ハ

以下ハ金可成吉大坂兵庫取立市在ハ、右觸成ハ振付應也

海舟書屋

存ハ

右ニ可成、其思、向、ハ、右觸取調、十、右振可付、其取、同、以上

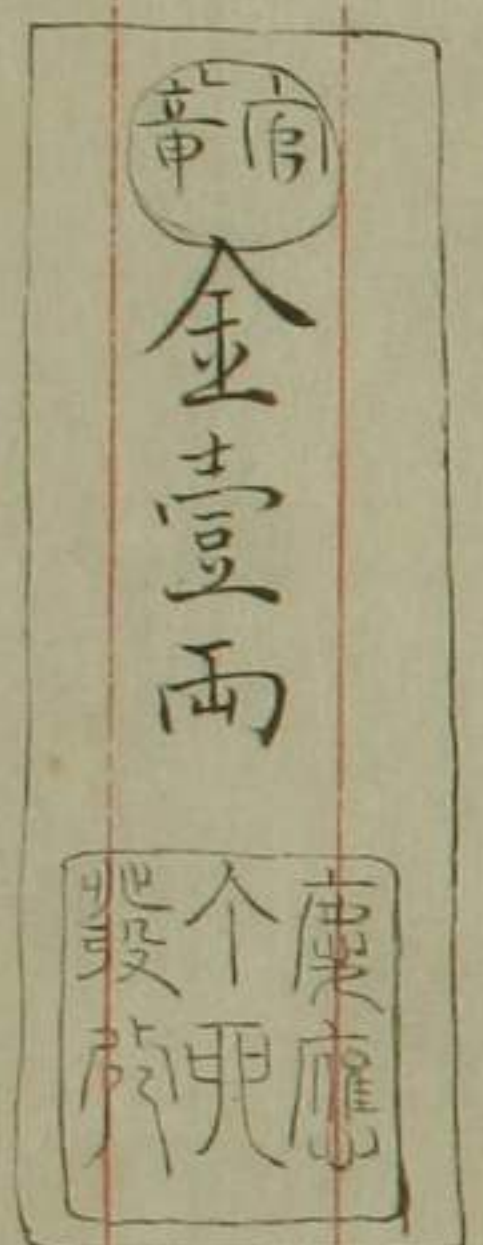
卯六月

一 高社会發行可成、金札招立出、其、自、京師、其、勘定、其、小、栗

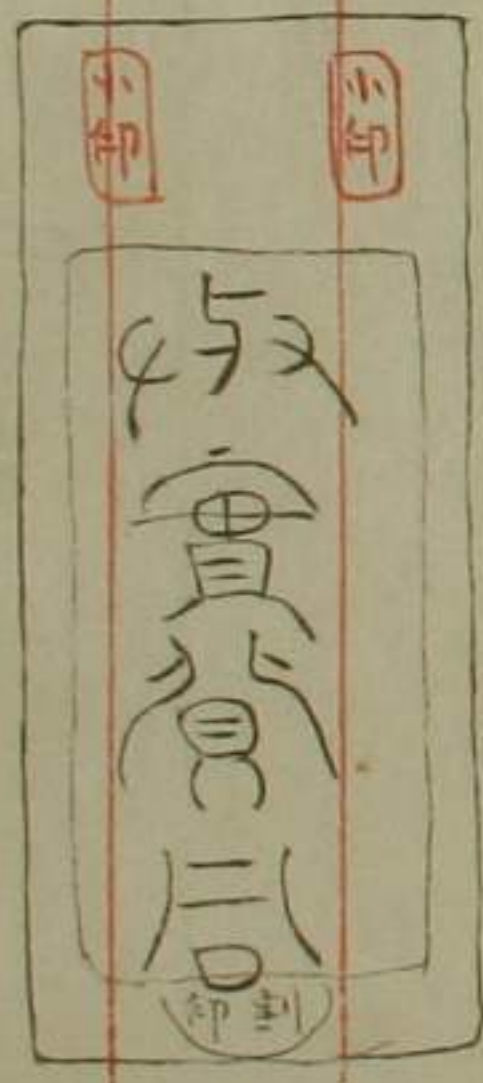
下、總、書、ハ、凡、中、隔、回、送、見、本、ハ、内、其、兩、ハ、分、左、ニ、字、出、也

押切印文字並

表



裏



同月八月美法方水渡

此度兵庫の天港高社の取手成り付て融通し、此の  
金札並分の内通用文仰出の自都の通用金銀同様  
其の外諸上納物取用、其の五箇内近國、其の支通  
可成、尤右札正金引換、後、高社會所并高社頭取  
の内達せ方、於引換、其の引替、付て、歩割減  
其の取歸、後、取引可成、其の  
有、極、片料私欲、其の取引可成、其の

同月高同人水渡

海舟書屋

海外諸國の学科修業又、商業、其の越度志願、者、  
中免、印章、水渡、其の自、其の取、其の取、其の取、  
神志川、其の取、其の取、其の取、其の取、其の取、  
後、其の取、其の取、其の取、其の取、其の取、

此頃因妙及達白云

慶徳、其の思存及達白、其の思、其の思、其の思、  
以、其の思、其の思、其の思、其の思、其の思、  
始、其の思、其の思、其の思、其の思、其の思、  
史、其の思、其の思、其の思、其の思、其の思、



幼帝の輔佐に専ら攝政殿下の如き路綫紳豪の力も  
為添 官武の一致に中上も一に取ら 神州の維持東西  
諸侯の羈維を進外夷を制して内を修らざる 幕府の所  
本業の以て交素より卓識の法眼の上を為行の儀に可有  
内坐の所を以て其の言に踐尺庸不肖の慶徳を以て内外倒  
回し振ふに其故上より侯伯より下匹夫に至る 幕下も外夷あるを  
知て我 神州あるを其の知るの振に中より其の遠く中國西國  
も中より其の閑幕の孫下し士民も第一怒生を生じ其の成  
中より其の茹中實の恐入の以て 幕下の内幼年を憐れ同舍の成  
長任不肖の其徳と也

海舟書屋

天朝も不及中侯伯以下庶民の對し其の失面皮日夜の堪泣血慙愧他  
日其泉地下より源烈殿に面謁し其の時此場合傍觀者も其の中群  
も其の言に言上仕の儀 幕下も其の失徳も其の其の如く其の  
其の敬ふ徳も罪も少く其の何亭天下の庶民に向肖し其の心も其の  
天朝の尊奉に後にも其の目前領神の禮に即の之も其の拘り  
奉る為其の外夷の接待振る其の内外彼我の分限も其の立般堅  
不遠滿清阿片の亂も其の右に復撤も其の其の踏ら振仕度高  
其の政弊も其の堂も其の征夷府に於て目前一箇の小利に其眼を  
其の其の其の却て不日大害も其の為招ら其の其の成辟言百萬の大  
軍の編制も其の成も其の幕府も其の是に其の其の努る不幸存仰致

神祖... 伊西井以下... 德臣... 奉命... 自省... 敦... 何... 賜... 執事

海舟書屋

九月土抄辰違白

誠惶誠恐... 似... 策... 大... 趣... 節...

動作トモ不随意ノ事ニ成テ再上ニ後執時未調不申ハ誠ニ遺憾  
ニ、次才ニテ只官此事ニ而已日夜熱心苦志在ニ因テ愚存ノ趣一  
家来共ヲ以テ言上仕ハ唯最重ニモ公明正大ノ道理ニ帰シ天下  
萬民ト共ニ 皇國數百年ノ國神ヲ一愛シ至誠ヲ以テ萬國ニ持シ  
王政復古ノ業ヲ建サレ可ラスノ大機會ト奉存ハ猶亦別紙  
所細覽々仰付度懇々ノ至情懇懇止泣血流涕々至ニ不堪ハ

慶應三丁卯年九月

松平容堂

守内ノ形勢古今ノ得失ヲ鑒シ誠惶誠恐頓首再拜伏惟

皇國興復ノ基業ヲ建シト欲セハ國神ヲ一定シ政府ヲ一新シ

海舟書屋

王政復古万國万世不愧者ヲ以テ不吉トスシ奸々際々良ヲ奉テ竟然  
ノ政ヲ旅行シ 朝幕諸侯各々此大基中ニ注意スルヲ以テ方今ノ  
急務ト奉存ハ前月四藩上京仕一々建白ノ次才モ有之容堂莫ハ  
病疴ニヨリテ歸國仕ハ以來尚又萬ト熟志仕ハ因テ早速再上右ノ  
次才一々不及建言仕ハ志願ニ由テ今日ニ至テ病疴難治  
不得止微賤ノ私共ヲ以テ愚存ノ趣旨ト恐言上為仕ハ

一 天下ノ大政ヲ議定スル全權ハ 朝廷ニテ乃我

皇國ノ制度法則一切万機京師議政所ヨリ出ヘシ

一 議政所上下ヲ分テ議事官ハ上公卿下陪臣庶民ニ至テ公明

純良ノ士ヲ撰擧スヘシ

一 序序學校ヲ都會ノ地ニ設ケ長幼ノ序ヲ分テ學術技藝ヲ教  
サレ可ラス

一 一切外蕃トノ規約ハ兵庫港ニ於テ新ニ 朝廷ノ大臣ト諸藩ト  
相議シ道理明確ノ新條約ヲ結ビ誠實ノ高法ヲ行ヒ信義ヲ外  
蕃ニ失セサルヲ以テ至要トスヘシ

一 海陸軍備ハ一大至要トス軍備ヲ京抵ノ間ニ築造シ是ヲ  
朝廷守護ノ親兵トシ世界比類ナキノ兵隊ト為ス事ヲ要ス

一 中古以來政刑武門ニ出洋艦來港以後天下紛紜國家多難於是  
政權稍動シ是自然ノ勢也今日ニ至リ古來ノ舊弊ヲ改新シ  
枝葉ノ小修理ニ止マラス大根基ヲ建シテ以テ主トス

海舟書屋

一 朝廷ノ制度法則從前ノ輒例アリト雖方今時勢ニ參合シ或ハ當  
然ナラサレ者アリ且ク是ノ弊風ヲ除キ一新革メテ地球上ニ獨立スル  
ノ國本ヲ建ヘシ

一 議事ノ士大夫ハ私心ヲ去リ公平ニ其キ術策ヲ設ケス正直ヲ旨トシ既往ノ  
是非曲直ヲ問ハス一新更始今後ノ事ヲ視ルヲ要ス言論多ク實効  
少キノ通弊ヲ踏ヘカラス

右ノ條目恐クハ當今ノ急務内外ノ至要是ヲ捨テ他ニ求ムヘキモ  
八首之間款ト奉存ル然ハ則職ニ成敗利鈍ヲ視觀シ一心協力  
万事ニ亘テ貫徹政シク操有之度ニ或ハ從來ノ事件ヲ執リ  
辨難抗論 相善清談互ニ相争フ之意アレハ尤然ル可ス

是則客堂ノ志願ニ由望ハ依テ愚昧不才ヲ不顧大意建言仕ハ  
就テハ乍恐是等ノ次才空クハ振擡志氣ヲ以テ天下ノ為ニ殘懷  
不少ハ猶又此上寛仁ノ志趣志ヲ以テ微賤ノ私共ト雖  
所親問被仰自度奉懇預ハ

慶應三年丁卯九月

松平土佐守家来

神山 佐兵衛

福岡 藤次

後藤 象二郎

寺村 左衛

同日美濃守長渡

海舟書屋

此度也私以用達等引之云蒸氣和御所役當月中了大坂表  
ハ代返給ハ間以用務以ハ勿論諸家亦來百姓所人婦女等ニ至  
右和御所ニ以給送之原あり徳手次才史取會社ト中ニ以給  
入用等出未之ハ振可收ハ止以用物ト勿停諸家荷物是又因雨ハ  
中ニ以才未當ハ送受之ハ積之ハ其ニハ九法事ハ史清會社結  
合ハ以用達等ハ可收未對ハ  
右ハ振向ハハ可收未解ハ

同月十日亦同人長渡

今度兵庫以言港ニ自之ハ交易ハ助孤董大ニ可長成ハハ南社ハ取  
立未成ハ交高社ト外ト其ニ取列送出來振存居ハ者ト有ハハハニ

北史云古人心得連... 神志川長... 彼  
同樣務手... 取引可也

右... 執中... 代官... 領主... 地... 領... 可... 未... 解

同月廿一日前同人未後

別紙未達... 市言取... 市... 廿五日別紙

... 市所... 仰出... 廿六日於京地... 仰出... 廿日

未達

十月

去... 廿三日於京地... 仰出... 上意... 以言... 自... 字

海舟書屋

我

皇國時運... 沿革... 觀... 昔... 王... 綱... 紐... 解... 相... 家... 權... 之... 執... 保

平... 亂... 改... 權... 武... 門... 之... 移... 了... 我... 祖... 宗... 之... 為... 更... 罷... 眷... 之... 蒙

以... 百... 餘... 年... 子... 孫... 未... 美... 我... 之... 職... 之... 奉... 成... 之... 雖... 改... 刑... 當... 之... 失... 亦

不... 少... 今... 日... 之... 形... 勢... 之... 為... 也... 畢... 竟... 薄... 德... 之... 所... 故... 而... 堪... 懣... 懼... 之... 况... 也

當... 今... 外... 國... 之... 交... 際... 日... 之... 盛... 而... 日... 之... 愈... 朝... 權... 一... 達... 之... 亦... 出... 而... 亦... 也

綱... 紀... 結... 之... 間... 從... 者... 之... 舊... 習... 之... 改... 也... 改... 權... 之... 也

朝... 廷... 之... 歸... 一... 度... 之... 天... 下... 之... 公... 議... 之... 也... 也

聖... 斷... 之... 仰... 之... 同... 心... 協... 力... 共... 之... 皇... 國... 之... 保... 護... 也... 必... 海... 外... 萬... 國... 之... 可... 並... 立... 我... 國... 家... 之... 所... 存... 不... 過... 之... 也... 去... 於... 足... 之... 也... 也

有し、仰忘憚る不憚可中少

十月

今我上意、一趣、當今宇内、形勢、申洞察、申述、  
外國交通、道盛、開、申、政權、二途、未分、  
皇國、綱紀、為、立、件、永久、治安、為、計、遠大、  
申深慮、仰出、誠以、幸感、仰、  
此過失、申一身、引、申、  
朝廷、申、  
共以、幸恐、入、  
不中、  
海舟書屋

本以武威去張の操一際高貴志勤務可中合

從所所、仰出、申言、付字

祖宗以來、申委任、  
を考察、  
天下、同心、盡力、  
宸襟、申沙汰、  
同斷、  
大事件、外、  
朝廷、  
朝廷、

同斷、仰出、申言、付字

大事件、外、  
朝廷、  
朝廷、

可有し走込し交支配地市中取締書了先是迄し通し  
可及 市沙汰事

同月十九日於京地美保町書渡

一昨十七日別紙一通 市所より仰立の交支下札一通

仰出

市通書十九日於京地在京并家来詰合し一万石以上半止の  
供し西より相達するに餘し西より可相達

一昨十五日の 仰出の別紙の内已に衆議上し由文言召し諸侯

海舟書屋

上京し上公議を為すに掛り候し詰合諸侯諸藩士等し會議  
仰付候し由中より

下札 書面一通

諸大名伺り 仰出書了於支役取扱の由文意諸侯より支役  
伺書出書し衆議より決定し上の支役を以て 仰出候し  
由中より

下札 尤於支役事より衆議の上取扱し事し尋常小事  
より取扱し事

支配地より由文意山城國その他 市領所より候し由中より又  
徳川領所より 仰出候し由中より



下ヶ札 支配地之儀、 禁裡申領所之事

薩長土藩寺上言

今般幕府政權を 朝廷に奉還仕、次才誠以漢古之  
 中大業新百年、英新、以望、 序國體の变革、宇宙之  
 間、亦獨立可、遊、の基中、の望、の、微賤、私、之、也、深、く  
 天下、之、為、二、幸、恐、懼、の、旨、也、衆、庶、議、事、之、意、之、以、諸、藩、士  
 共、之、名、出席、之、由、下、問、之、仰、旨、之、儀、謹、而、奉、言、上、  
 一、徳川家取扱、之、席、之、當時、伺、出、之、通、之、仰、旨、至、召、之、諸  
 侯、之、儀、之、上、の、確定、之、遊、可、然、之、幸、存、  
 一、股、走、之、公、卿、方、近、之、上、坂、之、間、有、之、の、趣、由、望、之、以、其、推、之、右、等、之、次、才

海舟書屋

一 股走之公卿方近之上坂之間有之の趣由望之以其推之右等之次才

二 未成之儀之有之召之召之諸侯會議初也

一 外取扱之儀之暫時政之方之宜之圖召之諸侯會議之上

一 外國取扱之儀之暫時政之方之宜之圖召之諸侯會議之上

皇國一新之、以 朝廷、之、條、約、可、也、為、結、換、在、兵、庫、開、港、之、處、

今般大改革、之、以、國、神、變、換、之、次、才、談判、之、及、之、美、延、之、可、

然、外、之、幸、存、

右、之、件、之、當時、在京、任、三、藩、之、者、也、同、意、仕、之、付、才、恐、連、名、

中、上、之、書、外、尚、又、口、上、之、以、言、上、可、仕、誠、恐、誠、惶、頓、首、謹、言、

松平修理大夫内

卯十月

関山

記

松平左衛門守内

辻

将曹

松平土佐守内

後藤象二郎

尾張前大納言 奏上

謹言 幸言上 慶長頃日政權之義 奏聞之趣被

聞食 昔謹言伏兼任 右之獨慶長之罪而已 亦不肯之臣慶  
徳久敷親藩 立場柄 在輔翼 事不行 福竟 今日

海舟書屋

形勢 立至 一段誠以恐懼戰慄 不堪 臣慶孫之罪 不少存

是迄格別 序罷過之蒙 過分 官爵之汚 居中之受

何卒 以降等 内沙汰之蒙 責而萬分 一之由 債心中慶只

臣等 奉待罪 臣慶孫 誠惶誠恐 頓首 謹言

十一月

紀 諸君 意見書

今 殺中 後政 内 奉 曠世 内 猛勢 大公 至誠 内 英國 子 為  
出 内 奉 實 内 堪 慮 内 吹 才 保 古 連 枝 内 善 代 臣 子 而

論 内 為

九重神印冲撃下の御抱し物柄 帝社宗史世に大業  
 卒然一朝帝辭職未成に候多し座視信教幸に一き悲憤痛恨  
 此事に北上の利害得失を顧為 徳川氏益君臣の大義を  
 砥き次に三百年來にの高恩を較べ外無事に候と幸存の抑  
 東照宮 所成徳を以天下の載定を為す大に内外諸侯を討せり  
 此より何れも君臣の義を守りし事殆三百年の功德に隆寧に  
 前古の未有の例也長く交連年草芥不逞し徳を盡張  
 一禍も差肩懐し内々醜一以才に羽翼を幸制の孤立し勢に  
 成り既し近來討幕し止む唱に玉り又一變して今日に  
 場合幸溜刺諸侯の進退今日より支役を以て取扱はざるに  
 海舟書屋

出立又台に諸侯上京し上り 王臣の心得に概に沙汰も出され  
 越凡謀もたし一室に恐入の以て一旦右  
 相命を下りし上り即日幕府に君臣の恩誼未絶の通り又  
 如何様し変事出来りも勉斗一室に寒心に玉に幸存の支子  
 弟切腹を建立し去り大封を以て宛行の候し中迄も其の  
 偏重し私よりし後にも為し其の形も時勢にこそ能く扶  
 持匡救し力も盡し候し為し其の交昇平教百年上下の情隔  
 絶し君臣の恩義満満に赴き其の連枝の善代に向て各々  
 和民を和し自分開拓封殖の心得に有る甚く候し其の  
 其説に龍給せし傳し幕府に君臣の大義を忘れず候し

計近年國家の多難、おかし敷い外各

天幕、間々周旋し、御臨釋し、以て方々、今、歴世の、大権

ふ、お失、一途、以て、諸侯、お比、有、任、川、家、為

成、事、定、冠、履、新、倒、綱、常、拂、也、世、運、も、可、中、嗚、呼、年

、を、て、松、柏、後、凋、を、知、誰、幕、府、君、臣、大、義、を、明、し、

寧、忘、思、王、臣、多、ん、り、後、今、全、義、に、陪、臣、と、り、益、砥、節

奮、武、し、目、的、お、立、お、即、依、然、と、徳、川、氏、お、舊、業、お、失

世、運、お、扱、也、期、も、可、有、い、後、存、お、後、お、深、業、お、足、也、可、有、い

國、家、い、為、諸、お、示、お、度、事、也

十一月十七日、稻葉兵部大権、松平縫殿、於、京、城、お、持、来、款、書、云

海舟書屋

今度我獨新を以非常の大變革を為せしは素より足る事あり

由、お、あ、り、其、方、々、於、て、當、家、し、も、甚、お、れ、を、憂、ひ、一、身、を、撰、て、東、帰

を、促、ま、り、赤、心、を、懇、切、憂、也、百、餘、年、來、君、臣、膠、漆、を、情、誼、友

可、有、い、深、く、満、足、依、賴、も、交、也、我、お、家、を、思、お、お、方、共、も、夫

も、何、と、謂、れ、ふ、一、朝、也、社、宗、以、來、所、受、し、大、典、雄、圖、を

變、ま、り、の、理、お、ん、や、近、年、政、權、二、途、お、出、る、の、勢、也、至、も、時、運、い、可

使、然、況、や、外、國、交、際、日、お、盛、お、り、お、當、り、政、務、在、其、第、一、を、送

る、決、て、永、世、皇、國、鎮、靜、多、事、安、寧、い、見、振、る、也、大、お

憂、お、お、り、深、く、思、お、遠、く、謀、る、皇、國、の、大、権、を、一、し

て、天、下、を、協、同、會、議、全、國、の、力、を、命、て、事、に、從、つ、海、外、一、方、國、と

可並立し大業可期也其方其於也 皇國事家し為ゆ而冬  
を熟考し今日我々為ゆし而志の至懇至切し忠膽義志を苞  
蓄し夙夜懈事なく職事ニ勤勞せん事偏し可生ニ我久  
交京師の客居し懐郷し情甚切なれ也 公武の務更し餘暇不  
く昨秋相續以後も関東人心し勤惰向背も拘り念以未帰  
の念日夜止らずしとも國家多事の時より辱くも

先帝以来厚く 朝廷の殊遇寵頼を蒙り君臣の情義即  
今 禁闕の側を離れ能く其の進退維谷も可謂ふれ  
とも強志擔當偏し名義を立し 朝廷も善み社宗も事  
不然困心衡慮し艱難諒知も一し抑屈伸消長も自然の

海舟書屋

運大道を履んて時運に從ひ時を應じて活動もまた英雄の所為也  
我 不肖といへども 東照神君の血胤を流し當家を未續し國  
家の為哲きて不考あらんとも其方共於心も志三百餘年不眠  
坐食の思も較ぶ秋におもひ義従を煉り職事を勵み我を  
輔けて聊も怠り勿れ此旨諸役末々迄も可し申す

十一月十日

十二月 左し通し仰出  
徳川内府管内の形勢を察し政權奉歸し旨打朝廷萬機  
所裁決に依りて自ら博く天下し公議を以衆人と休戚を同し

徳川祖先の制度、美事良法を、倭に傳へ、皇朝を治るに、  
 以て聖道を御付の儀、其の憚忌、諱極言、其野論、準繩補正、  
 勤王の實効を顯し、下人民の心を安んず、皇國を地球中、  
 冠絶せしむ、操濟勵可也、御沙汰之事、  
 比年天下素乱、人心不和、生一況や外國之交際日、隆りて  
 國家危急、秋三、急を今度、王政一新、進、舊典復古、且  
 明春、所大禮、其為行、其冊、其人心一和、其先務、其為進  
 近年出陣、其軍、其為解、其志、其志、其志、其志、其志、其志、  
 内制外、其才、其可、其立、其思、其思、其思、其思、其思、其思、  
 親、皇國之情、慈、可、存、事、

海舟書屋

今度大樹奉歸政權、王政一新、折柄、強以人心、居合、其付、  
 於之、進、其後、其典、其為、其深、其為、其恨、宸襟、其事、  
 所元服、并立、大后、進、所大禮、其為、行、其又、  
 先帝周忌、其成、其所謂、既往、不替、其古、其冊、其以、人心、一和、事、要、  
 其思、其則、先年、采防、長事、件、彼、是、紛、其有、其也、其寬、大、其也、  
 置、其知、立、大儀、父子、宗家、其免、入、洛、官、位、如、元、被、復、其也、  
 仰出、其事、

前將軍 奏御書

臣慶喜、不肖、其身、以、從、奉、蒙、其諭、其最、其思、不堪、恐、悚、感、戴、

玉作不及夙夜不安寢食苦心焦意守内之形勢之懸案任政於一  
 由萬國並立之 内國威在輝々為度々天下之公議を乞ふに朽  
 内基中亦立度々微事より祖宗継業に政權を幸帰同心協力  
 政律内確定者度善く列藩に足之可未尋越建言仕行將  
 軍職内辭退中上外召之諸侯亦議未決は是とて通可志内  
 昔内沙汰は自右冬若く上同心戮力天下公議稟論を採大公  
 至平の内規則亦善度幸存の外代乞ふに鄙事亦皇威載仕  
 旦夕企中亦立内外並料人々今度 臣等表内難末の内沙汰言  
 之而乞ふに内詰合列藩亦議之は是とて俄に一支藩我裝を以  
 宮内之立入未曾有く大内変革 仰出由之

海舟書屋

先帝より帝遺托を為立の攝政殿下を傳職に舊眷に宮内方  
 之善故授作せられ過す 先朝諫書に公卿名を授擢し  
 陪臣に非半猥々 玉座近く徘徊致致千年來に朝典を汚す  
 餘も 帝善忘柄美々 仰出内沙汰に越して悉く冒瑛  
 亦及し實に恐懼し玉帝存に慨令 一聖教より出出候に其  
 可也忠諫答況や中今  
 帝幼冲之君に為立の折柄右極に攻守に立玉に而て天下に乱  
 階乃民に深土度眼前に迫り急に建言仕の素願も亦立金匱  
 無夢し 皇統も如何に為立の穴と奉恐痛 臣慶喜自今  
 之深憂此事の内中も殊更外國交際に候も 皇國一神に関

係仕に不客易事件に自前件に如き 聖断を矯卓一時  
 之可見を以て慶賀を成すに 皇國に大害を醸す後之必  
 然と別之深憂仕に寫最前真に 聖意より也 仰出  
 中沙法に隨ひ天下に公諦未決に是は是迄に通取扱に各鄙  
 言に趣申聞文に成下為台申上通公明正大速に天下列藩  
 之衆議を以て冬正に舉邦を退け萬世に朽に由規則未立  
 上と幸寧

宸襟下と為民を安し様仕度臣慶喜千萬懇願し至  
 奉存に此段謹言 奏聞仕に

慶 喜

海舟書屋

同月十二日尾張前大納言を以 奏上

防長に交置し義に付内申尋上  
 殿慮し通し 仰出異議申上族も之を以て得共万一是存に事  
 有し騷動に及ばざるに付 所仰君子も之を在り柄柄自也右振  
 之勢ナリしに申發動に勿論 皇威も如何可方知左に深愜  
 殿意に此次の鎮撫設得し力を尽し申沙法に執事畏に  
 其後宮闈戒甚く以て同に上非昔に由変年々 仰出に付  
 別之鎮撫方深く痛心仕に意に諸役人始今日に至る程に  
 論一置の好む何多人数に鎮撫方深心配仕に旨に肯誠意を



以多王様走し道を通し不互に後下輩に粗忽より水沓に属し  
ハ振成の如く此上御く幸忍入り事ニ付右人の折合ハ是軒州大坂  
表ハ右越中ハ右も今年末、この鎮撫降、禁闕之下

中安心の内場合ニ位度も事ニ由望の間微裏に程序諒察を成  
下度ハ右伺候し上出立可任事ニし、彼是手取る取の内、あ、一  
頼中事、過誤より國家に事大事を立申出、ハ、却る事畏入、  
ハ自直様出發仕、事ニ由望、依り此辰中上置、以上

十二月十二日

慶 喜

幕府政治ハ萬國其比を見ても外より一種異常の特例あり

海舟書屋

其源相家の専権ハ胚胎降、平源二氏、及び朝権今、或人  
の手、歸一録府以来因仍八百餘年天下、此ハ一独ハ亦惟、若  
不、北條氏の陪臣を以て國命を執る、及て其情逆、特、  
甚、この、雖、職位を皆王家の賜ふ、而、君臣名分  
の大義、至てハ歴然、中、存、千古廢滅、可、さる  
あり、元和、後、依然、武治の舊制、仍、之、つ、を、  
皇室を尊、此、儀、二、百餘年の太平、維、持、事、  
前代、教、氏、の、比、あ、一、旦、外、國、交、通、の、開、く、及、て、  
一、變、一、變、せ、る、ハ、何、と、ふ、か、將、軍、を、王、朝、の、臣、録、  
て、世、界、各、國、帝、王、と、未、比、有、り、以、て、對、等、の、交、誼、を、訂、せ、ん

とも孰れも其當を以て云へし御向きの事等我邦の事情  
を語るに故に異議を及ぼし雖も之を以て之を審みせし  
豈に其外況や名分の論一に我邦内より起り朝議幕令  
毎に表裏一天下紛然詭歌朝觀より方向を迷ふ於是こ  
其實權を失き羊質虎皮徒に舊態を維持せんと其  
豈に得るや其較正有司一時の彌縫をつとむ時と変化  
をも促し之を一として之を是は枝葉の之を大木を論  
せしむ世界開明の氣運を趣きしるる勢を舊態を維持する  
を得る以て爰に之を謂はざるを得る今開港訂約の趣原

海舟書屋

より天保以後邦内の形勢を歴評し以て外交の國家關係を  
るの重重大を知らしむんことを我々豈に喜て既往の刺戟を  
喋りせん哉

木村芥舟  
校訂 伴 鐵太郎  
寫字 竹内帶 陵  
山下文 齋

開國起原卷五十大尾

文久年間邦内之形勢二

文久二年戊八月二日松平長門守以  
院傳 奏請 奏元會相渡以書舟  
於京師學習

戊午己未官武降點函等之輩進之再出相  
城以不於地下之輩之令以其後之分凡方之

召子之被免下有之也故 思在公三條入通内  
 府像之公為忠魂之贈右大臣公二符白之於  
 水戶故中仍云以出格之公之贈大臣公云  
 思在公且性年長國政等二句模死之者  
 初其後安島節日猶及吉左衛門已下法圓之士  
 於國東死罪且治軍死公者國事二死公輩近  
 之公見一卷等二句治死公者其灵魂拓集以  
 祀收葬令子孫祭祀公故也 托度公現之者  
 在之文之如齋相復公故也  
 敵意二公為 五公不拘路之故是公之奉奉此

海舟書屋

名其向之有調不渡板子之下中出其上若像之  
 飯清所並示也 五層 思在公奉 右一  
 水戶幕中仍云為國家忠節令力卓越之故也  
 敵感二身之贈大臣公二身尚又於高申仍云  
 也 其意也  
 皇國之有丹波故自幕府中治公故也 托度  
 思在公奉 右一  
 三條恭內大臣  
 右之現立中 皇國之為忠節公故  
 敵感不斜拾別之 思在公之 右大臣之贈之 右一

右 勅使八月九日淨廟派誠二子院

公也

右三通長の事は海之國東下向之上周旋の事  
と名して同人各府之上文と見出公也

